2023年3月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第554号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

第38回梓会出版文化賞を受賞して

□■□ ―――――――――――――― ///☆

出版は果てしのない旅に思える。最初はぺらっとした原稿の束が手を加えるたびに違った立体的なものになっていく。設計図の通りには行かなくてもいくつもの発見や驚きがあって、飽きることがない。

文・株式会社書肆侃侃房　代表　田島安江

授賞式集合写真

10月19日付のその素晴らしい知らせが届いたとき、私は会社にいなかった。そのときはちょうど佐賀県有田の筒井家で短歌ムック「ねむらない樹」10号「笹井宏之特集」の打ち合わせ中だったからだ。会社からのラインに「第38回梓会出版文化賞」受賞のご連絡、という文字が配信されてきた。思わず心が躍った。実はこの文化賞については、一昨年、地方・小出版流通センターの川上賢一さんから言われたことがあった。自分で応募しないともらえない賞だよ、と。今まで応募したことがないなら、ぜひ、やってみたら、と言われたのがきっかけだった。そうか、書肆侃侃房も創立20周年を迎えたことだし、最近は何人もの著者がいくつかの賞も受賞している。いい機会かもしれない。そんな思いから初めて、会社として応募した。その時は軽い気持ちだったと思う。それが大変な賞だということが今回、初めてわかった。

授賞式は2023年1月12日。コロナ禍のために授賞式が開かれなかった、過去二回分の受賞社もまとめて行うことになったのだという。

ということで、1月12日、授賞式会場に向かった。

受賞の理由については、選考委員の小野正嗣さんの言葉を引用させていただきたい。

――今回の選考委員会は10月12日に開かれました。全国の765社余りの出版社に応募を呼びかけ、そのうち69社が選考対象となりました。一次選考では、各社が寄せてくださった自選書類を、各委員が精査し、それぞれが4社を選びます。その結果、全体として15社が候補となり、選考会での議論となります。この一次選考で、複数票を獲得した出版社が複数ありました。書肆侃侃房、南方新社、風媒社、タバブックス、悠書館です。（中略）

地方に根を下ろして地道に良書を作り続けている出版社を正当に評価したいという気持ちです。実際、これまでも良質な地方出版社の受賞を願う声があったとも聞きました。今回、選考会まで残った出版社のうち、書肆侃侃房は福岡、南方新社は鹿児島、風媒社は名古屋に拠点を置く小規模出版社です。そのなかでも書肆侃侃房が圧倒的な支持を集め、満場一致で梓会出版文化賞の受賞が決まりました。

書肆侃侃房は今年で設立20年の若い出版社ですが、いまや文芸の世界においてその名を知らぬ者がいないほどの存在感を放っています。『ことばと』は、それに先行する『たべるのがおそい』とともに福岡発の文芸誌として、ともすれば東京中心の文学シーンに瑞々しい新風を吹かせました。歌集の出版にも力を注ぎ、数々の賞を受賞するなど現代短歌界への貢献には瞠目すべきものがあります。また、韓国に近い福岡という土地柄にふさわしく、韓国現代文学を積極的に翻訳紹介してきました。昨今はその地平を拡張し、ポルトガルのノーベル賞作家サラマーゴの『象の旅』を刊行するなど、「世界文学」を視野に入れた出版活動のさらなる発展を予感させます。今回、選

考会で絶賛されたのが、『左川ちか全集』の刊行です。これは、ジョイスやウルフの翻訳を行ない、詩人として活躍した左川ちかの残した詩、日記、書簡、翻訳を収め、早逝したこの未知の詩人の全貌を明らかにしようとするもので、将来の左川ちか研究の礎となりうる労作です（学術的意義という点では、『カンタベリー物語』の共同新訳版を刊行した悠書房も高く評価されたことを言い添えておきます）。（一部抜粋）――

ライブラリ展示書肆侃侃房

書肆侃侃房の20年を振り返る

書肆侃侃房にとって20年の節目での受賞というありがたい機会なので、この20年を簡単に振り返ってみたい。最近のことはみな、小野さんが伝えてくださったので、初期のころのことを書いておくことにしたい。いまの株式会社書肆侃侃房のルーツはその頃にあるからだ。

福岡の出版社葦書房でわずかに出版を学んだのち、30年ほどの月日が流れたころ、わたしは、編集プロダクションとしての、システムクリエート有限会社を立ち上げた。1989年のこと。その時はまだ自分で出版社をやる気はなかった。

福岡県立女子大学を出てすぐ大分県庁職員になり、それを無謀にもわずか2年で辞めて、福岡にできたばかりの「葦書房」に拾ってもらった。出版社に勤めたとはいえ、出向ばかりで本づくりはさせてもらえず、やっと3冊ほど手掛けられるようになったところ、見事にリストラにあう。

それから長い歳月が経過し、やがて、出版社立ち上げの機会が訪れた。

その空白の期間は私にとっても会社にとっても無駄なことではなかった。葦書房でたった一人の従業員だった1年半、出向先は広告代理店のストで抜けたコピーライターの補助要員、印刷会社の版下制作、タブロイド判8ページの小さな新聞社など。

オフセット印刷の版下づくりで、書体や級数指定、印刷までの工程をつぶさに見ることができた。カッターナイフでの版下修正やペラ帳合いなどを教えてもらった。面付をし、絵や写真、カット、原稿の依頼もした。一眼レフのカメラを買って、週末には写真講座に行き、レイアウトのやり方教室にも通った。

リストラにあってしまったけど、出版の初歩だけは学ぶことができた。教えてくれたのはほとんどが印刷会社の営業マンで、印刷のいろはを教えてもらった。まだ活版号数活字と写植活字とが混在していたころのこと。葦書房の全員が素人に近かったので、教えてくれる人はいなかった。夜や休みの日は、他の人たちの校正紙をもらって持ち帰り、自分で校正もしてみた。とにかく、片っ端から本を読んだ。学生時代からずっと、ほとんど文庫しか買えなかったが、福岡には古本屋や貸本屋があったし、図書館にも通えた。お金がなくても、本さえ読めたらそれでよかった。読みたい本があるとそれをもって、喫茶店に行き、コーヒー一杯で何時間も粘った。学生時代も仕事をもってからも、喫茶店がいつでも仕事場だった。

その後、点々として、結婚、出産などのあと縁あって、編集プロダクションの会社を設立。博多駅近くの古いマンションの一室を借りてスタートさせた。それから月日は流れたが、書肆侃侃房という出版社設立はもう少し後だ。

よく聞かれるのは、何でこんなむずかしい名前の出版社にしたのか、ということ。書肆侃侃房という名前は、自分の詩集『水の家』につけた出版社名でしかなかった。書肆侃侃房設立のはるか10年も前のことだった。

書肆侃侃房設立のきっかけになった本は「山本巖ブックレット」全6巻。DMで予約販売、福岡市内の書店に委託で置いてもらった。わずか500冊ずつだったこともあり、在庫はすぐになくなり、増刷することに。そんなとき、地方・小出版流通センターに契約してもらうことができた。それからはしばらく、どうしたら売れる本になるか、模索が続いた。答えは一つ。一冊ずつ丁寧に作り、丁寧に売っていく。それを読者に届けるということに尽きるだろう。

とにかく、本は売れない。第一、なんの伝手もコネもないのだから、書店に置いてもらうことすらできない。東京や大阪の書店に行き、挨拶をするのもなかなか勇気のいることだったが『ママからの伝言　ゆりちかへ』という闘病記が起爆剤の役割を果たしてくれた。著者のテレニン晃子さんは、末期がんを患い、命がけで出産した娘の柚莉亜ちゃんはまだ一歳半。リリー・フランキーさんに帯コメントをもらえたり、テレビで取り上げられたり、幸運は波のように広がっていった。詳細は省くが、それが実現したのだから、世の中、何が起こるかわからない。

晃子さんの没後、テレビで取り上げられるたびに本の注文が増えた。一番はなんといっても「ザ・ベストハウス

ajiroでの20周年記念フェア展開写真。このあと全国に広がった

123／涙が止まらない　感動の実話本ベストスリー」で小学館、幻冬舎を抑えて1位になったことだ。翌朝から、会社の電話が鳴りやまなくなった。第一声は「お宅の出版社の名前、なんと読むの」だった。難読出版社名のベスト10に入るらしい。一度見たら忘れないとも。16刷り7万部。地方出版社異例のベストセラーと新聞に取り上げられたりした。一度も広告を打たずにこれだけ売れたのはなぜか。よく聞かれるがそれは私も知りたいことだった。遺族もわたしも初めから多くを望んだわけではない。2000冊のささやかな発刊からはじまったのだから。テレビの取材にもなるべく同行するようにした。あるとき、テレビ局のディレクターに聞いたことがある。普段、出版社からの売り込みがすごく多くて、できれば知られていない本を紹介したいと思うことがある。リサーチャーという人からまず企画をあげてもらう。電話で取材可能かどうか聞かれ、OKがでたら次はデスクから電話があれば、本物ですよ、という。リサーチャーが見つけてくれたということのようだ。

ちょうど、地方・小出版流通センターに顔を出すと川上さんから、ファックスと電話が鳴りやまなくて。ほら、これを見てごらん、という川上さんの手には申し込み書の束が握られていた。

そんな意図せぬタイミングや思いがけないことは、それからも何度か起こった。出版とはそんなドキドキの連続だ。だから楽しいし、危険な賭けでもある。

その一つは文学ムック「たべるのがおそい」の創刊。これはたまたま、初めての歌集出版をするフラワーしげること、西崎憲さんの『ビットとデシベル』の打ち合わせ中、文芸誌の現況へと話が弾み、文芸誌の世界について知ったことからだった。ムック本なら、書籍コードでだせますよ。何か楽しいこと、やれるかも。20年前といえば、出版不況といわれ、どんどん書店がなくなっていった頃だ。わたしが情報通だったら、斜陽といわれる出版の世界にもう一度踏み切れたかどうか。

創刊号で、今村夏子さんの「あひる」が芥川賞候補になったときも、芥川賞がどうやって選ばれていたか、知らなかった。

『あひる』は、芥川賞は逃したが第5回河合隼雄物語賞を受賞した。ノミネートは担当編集者にしか知らされず、他のノミネート作品が何かも教えない。決まったらすぐ記者発表するので連絡がつくようにしてほしい。ただし、作家には知らせないで、と言われた。今村さんが選ばれたとき、しみじみ嬉しかった。京都での授賞式もこぢんまりとしたとてもいい会だった。

今村夏子さんに続いて4号の宮内悠介さんという二人の芥川賞候補を出した「たべるのがおそい」は7号で終わったが、一年後の2020年、新たな文学ムック「ことばと」（佐々木敦編集長）が立ち上がり、創刊号の千葉雅也さん「マジックミラー」が第45回川端康成文学賞を受賞した。

歌集出版でも受賞が続く。ありがたかったのはSNSの存在。最初から今の短歌ブームを期待したわけではない。無名の歌人の歌集出版など、やめた方がいいといわれた。が、笹井宏之という稀有な歌人の歌を少しでも多くの読者に届けたかった。彼の短歌を読んで、これが現代短歌なのか。まるで現代詩を読んでいるようだと感じた。この歌集を作ってみたい。そう思った。

笹井宏之歌集二冊『ひとさらい』『てんとろり』は最初2000冊ずつがあっという間に在庫切れになった。Twitterでの拡散の勢いがすごかった。悲しみとやさしさに満ちた彼の短歌は、大切な人を亡くし、悲しみに浸っている人の心に届いた。ご両親の言葉が心に残った。宏之がこんなに早く亡くなるなら、読みたいという歌集をもっと買ってやればよかった。歌集、高いですものね、と。そうか。もっと安い価格で買える若い歌人の歌集がだせればいいのか。コストを抑える方法を考えてみよう。こうして始まった新鋭短歌シリーズはすでに60冊になり、他の歌集も加えると130冊を超えた。短歌の波は新鋭短歌シリーズにつづき、現代歌人シリーズ、ユニヴェール、短歌クラシックスへと広がっていった。

海外の出版も向こうからやってきてくれた。韓国の詩人との長い付き合いから始まったのが詩集や小説の出版だ。韓国女性文学シリーズや韓国文学の源流シリーズも始まったが、実は2013年にWoman’s Bestシリーズというのが最初だったが、置いてくれる書店はほとんどなかった。1号の『ジェシカ16歳　夢が私に勇気をくれた』オーストラリアの、ヨットで単独無寄港世界一周した勇気ある少女の実話だ。今回、奇しくもそのストーリーが映画『トゥルー・スピリット』になり、今年の2月からNetflixでの放映が始まった。

次が『幸せの残像』イスラムの少女たちの報われない恋の物語。名誉の殺人という、想像もできない過酷な状況にさらされているイスラムの少女の物語だ。著者は、殺人の恐怖から逃れ、多くの人の手でイスラム圏外の国に逃れてこの小説を書いたのだ。

劉暁波、劉霞の翻訳詩集も大事な仕

事だ。劉暁波の詩集は2冊。『牢屋の鼠』と『独り大海原に向かって』。劉霞は『毒薬』。武力でなく言葉による闘いによって、平和を求めるという壮大な詩のテーマは今こそ大事な作品ではないだろうか。

出版点数670冊越え、次の時代に向け進み始めている

2018年には福岡市天神に「本のあるところ ajiro」をオープン。書肆侃侃房が運営する書店だが、取次を通さない、いわば独立系書店である。ajiroは書肆侃侃房の本のアンテナショップ的な意味合いもある。トークイベントを行える自前のスペースもほしかったのだ。これは若い社員たちの強い希望で始まった。テーマもはっきりしていて、海外文学、詩歌、書肆侃侃房の本を中心においた。

旅の本「KanKanTrip」についても書いておきたい。もともと、編プロ時代に旅の本が中心だったこともあり、得意な分野だったのだが、こんなに手間暇かけてやるのなら、いっそ、自社で作ったほうがいいとある時思ったのがきっかけだった。旅が好きだったから、取材に一緒にいくこともあった。

1号はインドの旅の本で『ラダックと湖水の郷カシミール』著者の大西久恵さんと一緒に旅をした。ラダックは仏教、カシミールはイスラム。それぞれに東と西に分かれていて、宗教も生活習慣も違う。忘れられないのはカシミールへの車による移動。羊たちと道を分け合いながらの3日間の旅。くねくねと曲がりくねった未舗装の車の旅は確かに冒険だったし、黄土色した川はガンジスへと続いていた。丘の上にそびえるゴンパ。空の色のなんと美しいこと。旅の本はすでに20冊を越えた。

こうして書いてみると、出版は果てしのない旅に思える。最初はぺらっとした原稿の束が手を加えるたびに違った立体的なものになっていく。設計図の通りには行かなくてもいくつもの発見や驚きがあって、飽きることがない。

書肆侃侃房は20年を過ぎ、20周年記念誌「本は旅する」を作り、書店に「書肆侃侃房20周年フェアを開きませんか」と声かけをしたところ、なんと40店もの書店がやってくれた。2023年になってからは「書肆侃侃房短歌フェア」が始まった。新鋭短歌シリーズ60点をはじめ、歌集は130点を超えた。海外文学も増え続けている。20年の間に出版点数は670冊を越え、次の時代に向けて、進み始めている。次の5年、10年はどうなるのか。どこまで辿り着けるのだろう。社員みんなで考えていきたい。

＊

（たじま　やすえ／株式会社書肆侃侃房代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『安井浩司読本１　安井浩司による安井浩司』●安井浩司読本編集委員会編

戦後のいわゆる前衛俳句の先頭にいた、多行書き俳句が代名詞の高橋重信や、「東洋的無の世界」といった禅哲学とともに語られることの多い永田耕衣らの後継とも言われ、多くの俳句作品を残して2022年に亡くなった安井浩司の対談や評論、俳句時評などをまとめた一冊である。安井の自選句や未刊作品、初期自由詩も収録されていて、安井の全仕事を概観することができる。前衛俳句と言えば、しばしば独りよがりとも受け取れる不可解なイメージの盛り合わせで、有季定型写生を本筋とする俳句愛好者からは敬遠されるのが常であるが、安井俳句は、〈ひるがおや来るはひとつの二艘舟〉〈遂に聴く神の口ぶえ年の暮れ〉といった作品をを見るならば有季定型から大きく逸脱しているということもない。しかし、写実を旨とする読みからすれば、その作品を理解することはやはり難しい。本書における評論や対談にはこの安井俳句を理解するためのとば口となる発言が各所に見られる。例えばインタビュー「俳句と批評」」においては、俳句を〈第二〉芸術に貶めた桑原武夫の『第二芸術論』の衝撃をまともに受けた世代として「我々の世代には、スタート時点から、俳句を何の疑問も抱かずに信じていいのかという課題があったんです…」と言っている。また24歳の時に書かれた評論『言葉と想像力における抽象俳句の死角について』では、〈言葉の伝達能力〉や方法としての〈抽象〉について詳しく述べている。安井俳句について考える上で大いに参照すべきである。(T)

◆1819円・A5判・280頁・**金魚屋プレス日本版**・東京・202211刊・ISBN9784905221159

『安井浩司読本２　諸子百家による安井浩司論』●安井浩司読本編集委員会

『安井浩司読本１』が安井自身の作品や発言で構成されたものであるのに対して、こちらは安井の同時代俳人や現代若手俳人など他者による安井浩司論、句集評等々となっている。安井の師匠筋にあたる永田耕衣は、安井の処女句集『青年経』跋文で、安井の難解な俳句を「カオスの創造」と呼び、そのカオスについて「超関係的関係」と言い、世阿弥の言う「妙所之事」と類比させ、あるいは「物が二元に分かれない前の感覚」などとも説明する。安井と同じく「琴座」「俳句評論」に参加した俳人の河原枇杷男は、その安井論において「俳句の語法は、像的叙述が終わったところから、意味的叙述へ反転するものとして捉えられるが、彼の語法は像と意味の識閾に踏みとどまって、意味的叙述への安直な反転を怯える」と的確な言い方をしている。河原と同様、安井の盟友である大岡頌司は「安井の俳句は総じて性的である…反性欲的な俳句の世界に汎性欲的世界をもちこむ」と評する。ほかに執筆陣には、加藤郁乎や金子兜太、宇多喜代子といった顔ぶれが並んでいる。（T）

◆1819円・A5判・295頁・**金魚屋プレス日本版**・東京・202211刊・ISBN9784905221166

『仁義ある戦い －アフガン用水路建設　まかないボランティア日記』●杉山大二朗著

中村哲医師の活動支えるＮＧＯペシャワール会の現地料理担当者として、中村医師らとアフガンで過ごした６年間を綴る。

アフガンの夏はとても暑い、50度超える場合もある。護岸工事施工中に20キロある土嚢を担いでいるときに、脱水でめまいを生じ、すぐに水と塩を飲み、それと牛乳を飲んだ。日本では牛乳を飲むことはないが、カルシュウムが汗と一緒に出ていくからである。ラーメンは御馳走だという。

また日本人のワーカーにとって、日本料理は食べたいものだ。鯉の南蛮漬けにワーカー達から歓声があった。だが、アフガン人からは不評だった。酢の文化がないという。メニューとして、牛挽き肉の炒飯、豚汁もどき、出汁からの佃煮、大学芋を苦労しながら、作り喜ばれる。仲間たちのことも記してある。日本人ワーカー達とアフガン人らとの信頼関係は一朝一夕で築けるものではなく現地のダリ語、パシュリット語を覚えるのが大切である。伊藤和也さんは優しい人であった。試験農場に出かけては、キャンディーを子供たちに配った。彼は2008年8月26日強盗グループの凶弾に倒れた。

そして2019年12月4日中村哲医師も凶弾に倒れた。「中村医師は残された者達が意志を引き継いでいくことを信じて、水や食糧を得る方法や知の詰まったこの用水路を遺されたのだろう。」と本書は結んでいる。

（古賀邦雄 古賀河川図書館）

◆1700円・四六判・183頁・**忘羊社**・福岡・202302刊・ISBN9784907902322

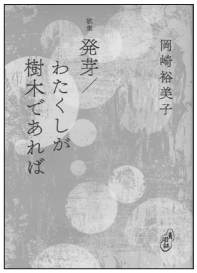
『見放さない！　その命　ウクライナ人道支援日誌 －世界大動乱（大恐慌）をのりこえる』●菅波茂編

ウクライナにおける、特定非営利活動法人AMDA（The Association of Medical Doctors of Asia）による、医療、保健、衛生に関わる緊急人道支援の記録である。AMDAは相互扶助、医療平和を基本理念として1984年に岡山市で設立され、世界各地で支援活動を行っている。ウクライナ避難者への支援活動は、2022年3月7日から、隣国ハンガリーとウクライナの国境の町で始まった。当初は紛争終結後のウクライナ国内医療再建協力を見据えていたが、10月からは、パートナーシップを結んだ現地の団体支援に切り替え、ハンガリーの首都ブタペストにある国立センメルワイス大学医学部に在籍する80名もの志の高い日本人学生にモニタリングをしてもらっているという。

本書は、開始から10月24日までの活動日誌を中心に、日本からの派遣者の報告、現地パートナー団体及び日本国内支援団体からのメッセージ、現地団体との協力協定、派遣者一覧、支援団体リスト、AMDA活動年表ほかからなる。日誌には、死に直面して心身に深い傷を負った人々と対応する張り詰めた医療現場の日常や、関係機関との折衝や協力要請の切迫した様子が生々しく綴られ、医療従事者の使命感の高さを知らされる。活動は今も続き、悲惨な状況がロシア国民に及んでいないかとも目を配る。日本人医学部生の「どこで何が必要で、我々に何かできることはあるのか」との言葉が胸に衝き刺さる。（飯澤文夫）

◆2000円・Ａ５判・364頁・**吉備人出版**・岡山・202212刊・ISBN9784860696993

『発芽／わたくしが樹木であれば』●岡崎裕美子著



「決められたルールのもとに言葉を紡ぐ」こんな行為が楽しくて、高校生の頃から短歌のような言葉の切れ端を教科書の隅に落書きしていた作者。大学在学中から短歌教室に通い始め、「未来短歌会」に入会し、故・岡井隆に師事。入会後すぐに“したあとの朝日はだるい　自転車に撤去予告の赤紙は揺れ”という歌を発表し、評判になった。この歌を含む第一歌集「発芽」が出版されたのが2005年。先ほどの歌のように恋愛及び性愛をテーマにしたものが多い。“Ｔシャツの下はもう見てしまったから（おそらくかたい）さわらせて、脳も”や、タイトルが出てくる“抱き合って眠れば夢が深くなる　ぶどうの発芽くらいの熱で”など、熱情、欲望が渦巻き、たまに“母”を詠んだ歌でやや現実に引き戻される。2017年に第二歌集「わたくしが樹木であれば」が出版され、こちらも変わらないテーマでありながら、“父の死”も扱っている。“階段ですれ違うとき目が合えば　あなたの組織になりたい、はやく”“突風に押されて坂をのぼりたり父の眠れる丘の墓まで”たとえばこんな風にひとつの歌集に同居している。

この度、絶版になっていた第一歌集と第二歌集を合本し、さらに2020年に「みちのおく芸術祭　山形ビエンナーレ」に出展された新作18首も加えて文庫化された。ファンには待望の一冊。岡井隆に“小説に一番ちかい文体で歌を書いてゐる”と評された世界が匂い立ち、濃密な三十一文字が息づいている。（Y）

◆1400円・文庫判・157頁・**青磁社**・京都・202212刊・ISBN9784861985577

『芸備線・福塩線　踏切のある風景』●山内正章著

線路と道路が交わる踏切。日に何本も列車が走るわけでないローカル線でも、毎日律義に遮断機を上げ下げしています。本書の舞台となる芸備線（広島駅～岡山県境）・福塩線（府中駅～塩町駅）は芸備線の三次以西を除けば、一日の列車の本数もわずかな日本屈指の閑散線区です。しかしそこでも踏切は日々働いています。そんなローカル線の踏切たちの風景が一冊にまとまりました。広島駅近くには6本もの線路をまたぐ巨大な踏切があります。ここはマツダスタジアムへの通り道でもあり、カープのユニホームを着た人たちの姿も見えます。そうかと思えば大都市広島の市街地にも、意外と多くの警報機も遮断機もない第4種踏切が存在することにも気づかされます。利用者にとって危険な踏切ではありますが、路地裏や堤防へと消えていく細い道を見ると、どういう人が使っているのかなとあれこれ想像してしまいます。中国山地に分け入れば雪化粧をする踏切もありますし、安芸高田市では地元のサンフレッチェ広島と湧永製薬の幟が並ぶ踏切も。場所ごとに様々な顔を見せてくれます。また踏切の名前には今では使われなくなった地名なども残っていて、そちらも興味深いですね。普段注目されない踏切ですが、こうしてまとめてみるとそれぞれの土地の特徴さえも伝えてくれる独特の趣があることがよくわかります。思わず写された踏切に立ってみたくなるような、魅力的な景色がたくさん詰まった写真集です。（副隊長）

◆1600円・B5判・131頁・**菁文社**・広島・202212刊・ISBN9784902368253

地方小出版流通センター　ジャンル別新刊案内

2023年1月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【お詫び】

※本誌2023年1月号に掲載した「ジャンル別新刊案内」に誤って2022年10月分が掲載されていました。関係者の方々にはご迷惑をおかけしまして申し訳ありません。
本来掲載されるべき2022年11月分データは、現在弊社ホームページからダウンロードできます。
https://neil.chips.jp/chihosho/sinkandata/2022_11data.txt
こちらを利用していただきますようお願いいたします。

【雑誌】

◆**S－style**　02　vol.698　プレスアート編　280mm×210mm　120頁　500円　プレスアート［宮城］978-4-503-22767-6　23/02

◆**編集部が本気で選んだ　宮城のおいしい店　－S－style kappo　特別編集**　プレスアート編　280mm×210mm　135頁　1800円　プレスアート［宮城］978-4-503-22770-6　23/01

◆**会津人群像**　No.45　阿部　隆一編　B5　131頁　1500円　歴史春秋社［福島］978-4-86762-016-8　23/01

◆**GREEN REPORT**　517　2023年1月号　廣瀬　仁編　A4　189頁　2546円　地域環境ネット［埼玉］978-4-909864-49-9　23/01

◆**かまくら春秋**　No.632　2022年12月号　伊藤　玄二郎編　B6　108頁　327円　かまくら春秋社［神奈川］978-4-7740-0871-4　22/12

◆**書21**　No.77　澤田　博史編　A4　88頁　2000円　匠出版［神奈川］978-4-925212-87-8　23/01

◆**道**　No.215　木村　郁子編　A4　74頁　1143円　どう出版［神奈川］978-4-910001-28-9　23/01

◆**くらしと教育をつなぐ　We**　No.242　2023年2／3月号　中村　泰子編　A5　80頁　830円　フェミックス［神奈川］978-4-910420-17-2　23/02

◆**日本宗教文化史研究**　第52号　日本宗教文化史学会編　A5　94頁　2700円　岩田書院［東京］978-4-503-22759-1　22/11

◆**アーカイブズ学研究**　No.37　日本アーカイブズ学会編　A4　155頁　2500円　岩田書院［東京］978-4-503-22765-2　22/12

◆**明日を拓く**　第134・135号　No.217・218　明日を拓く編集委員会編　A5　263頁　2000円　解放書店［東京］978-4-503-22761-4　22/12

◆**月刊終活**　269　2023年2月号　清水　明央編　A4　84頁　1500円　鎌倉新書［東京］978-4-503-22771-3　23/02

◆**月刊住職**　No.291　2023年2月号　矢澤　澄道編　A5　179頁　1546円　興山舎［東京］978-4-910408-22-4　23/02

◆**子どもの文化**　No.617　2023年2月号　片岡　輝編　A5　48頁　290円　子どもの文化研究所［東京］978-4-503-22772-0　23/02

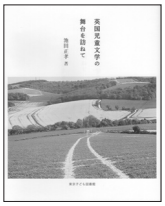
◆**子どもと本**　第172号　子ども文庫の会編　A5　44頁　590円　子ども文庫の会［東京］

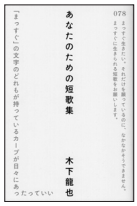
売行良好書

期間：2023年1月15日～2月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『英国児童文学の舞台を訪ねて』1600円・東京子ども図書館　(2)『ベルクソン思想の現在』1800円・書肆侃侃房　(3)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(4)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(5)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(6)『愛ことば』1200円・岩手日報社　(7)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(8)『カメスケのかわいい水辺の生き物１』1500円・花乱社　(9)『「新装版」対談　ヤポネシアの海辺から』2000円・弦書房　(10)『オールアラウンドユー』1800円・ナナロク社　(11)『明治・大正・昭和の出版が歩んだ道』1800円・出版メディアパル　(12)『極度の心配性で苦しむ私は、強迫性障害でした！！』1300円・燦燦舎





［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『出雲散家の芸と大名』2500円・大元出版　(2)『公共善エコノミー』2600円・鉱脈社　(3)『千夜曳獏』1800円・青磁社　(4)『日本の境界』3600円・北海道大学出版会　(5)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(6)『満洲国の近代建築遺産』8000円・中国書店（集広舎）　(7)『つながる沖縄近現代史』2200円・ボーダーインク　(8)『神の川　永遠に』1800円・北日本新聞社　(9)『茨城県北ジオブック』1000円・茨城新聞社　(10)『フィールドで使える　図説　植物検索ハンドブック　埼玉２９９８種類　改訂新版』3000円・さきたま出版会　(11)『まだ見ぬ科学のための科学技術コミュニケーション』1800円・共同文化社　(12)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(13)『極度の心配性で苦しむ私は、強迫性障害でした！！』1300円・燦燦舎　(14)『北のモノ コト ヒト』3600円・北海道大学出版会　(15)『復帰50年　平良孝七展』6000円・編集工房東洋企画

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼弊社設立と同じ1976年に発行され始めた新しい書評雑誌【本の雑誌】の元発行人で、本の雑誌社創業者の目黒考二さんがこの１月に肺がんのため亡くなりました。享年76歳でした。設立時からですから、50年にならんとするお付き合いでした。「本の雑誌」誌上に地方・小出版紹介コラムの頁を設けていただき、長い間連載させていただいたこともありました。目黒さんは北上次郎という筆名で日本に「書評文化」を花開かせた功績者と言えると思います。そしてその活動の中で、坪内祐三さん、群ようこさん、吉田伸子さんなど若手の活きのいい書き手を発掘し育ててきました。21年８月に亡くなったニコリの鍛治真起元社長に続き、同時代を生きてきた方の訃報が続き、寂しさ、脱力感が押し寄せてきます。（川上記）

▼仙台在住で現役書店員の佐藤厚志さんが第168回芥川賞を受賞されて話題となりましたが、佐藤さんは、地元仙台の「仙台短編文学賞」第３回（2019年）において【境界の円居（まどい）】という作品で大賞を受賞されていました。この「仙台短編文学賞」は2017年から始まった非常に若い文学賞ですが、【奥州ゆきを抄】で第１回大賞受賞の岸ノ里玉夫さんが「2022年論創ミステリ大賞」を受賞されるなど、注目度が高まっているようです。主催は仙台の出版社・新聞社３社（荒蝦夷、河北新報、プレスアート）で、東北にゆかりのある佐伯一麦さん（第１回）や柳美里さん（第３回）、いとうせいこうさん（第４回）といった作家の方々が選考委員に名を連ねています。2023年７月１日より開始し、11月15日締切の第７回の選考委員は伊坂幸太郎さんだとのこと。設立のきっかけは東日本大震災だったようで、設立趣旨には、震災を経験した仙台から、次の世代の文学が産まれることを願って、という言葉がありました。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。
honto.jp